

---

# 私の友人はゾンビらしい

筋肉痛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私の友人はゾンビらしい

### 【Nコード】

N1669Z

### 【作者名】

筋肉痛

### 【あらすじ】

日常を過ごす男は、ある日不思議な夢を見た。夢の中で会ったもう一人の自分。望みを叶えてくれると言うが、それが男とそのまわりを非日常へと引きずり込む。

自己解釈、独自設定、キャラ改変、などなどの要素を含みます。苦手な方はご注意ください。

## 第一話 プロローグ

時刻は約4時、斜光が教室内を赤く染めている。

教室には二人の生徒が向かい合って座って、話をしている。

「私は今日、おかしな夢を見たんだ」

「へえ、どんな？」

「それはな

私はいつものように暇な授業を受けていた。教師の声がとても気持ちのいい子守唄になっていたのを覚えている。

だから一眠りすることにしたのだ。

ここまではごく普通にあることだが、問題の夢の内容は普通ではなかった。

私は棺おけのような物の中で目を覚ました。いや、夢の中であつたから、目を開けたと訂正しておこう。

仰向けに寝ていたから必然的に上を見ていたのだが、そこで私を見下ろす影が見えたのだ。

私を見下ろしていたのは私だった。どこか輪郭がおぼろげで、今にも崩れてしまいそうな。

相手の私は、こう言った。

「いつまでその中にいるつもりだ」

確かに棺おけに入っているなど縁起が悪い。私は出ることにした。こんな時、身体が動かない。なんてことが起こるのが定番だが、私は簡単に出ることができた。

私は相手の私と向き合った。相手の私は、なんとも楽しそうな顔をしていたな。

「おもしろいね、君」

「む、いきなり人をおもしろいなどと言うのはいささか無礼ではないかね。とらえ方によつては、相手を傷つけるぞ」

夢の住人に向かってお前はなにを言っているのか、と思ったか？  
なに、気にすることは無い。私自身少なからずそう思っていた。自分で行った行動なのにな。

相手の私はさらに口角を上げ、新しい玩具を手に入れた子供のように笑った。

「これは失礼。私は思ったことを口にだしてしまう癖があつてな」

この言葉に私はドキリとしたものだ。相手の私は、もしかすると私が気づいていない自分を教えてくれているのでは、と考えてしまつてな。

そこは夢の中だし、私の姿をしている。

夢は自分自身の経験を映し出している、と言われている場合もあるわけだからそうゆうこともあるだろう。

「詫びと言つてはなんだが、そうだな……一つ望みを叶えてやろうか？」

お前なら、こつ言われてどう答える？

ここは夢の中だ。ここで望めば偽物ではあるが叶うだろう。  
かわいい女子とお近づきになりたい、か。いかにもお前らしい答  
えだな。

私はこう答えた。

「断らせてもらおう。望みは、私自身で叶えてこそ意味がある。正  
確にはその望みに至るまでの道のりに、だがな」

「なんだと？私に恥をかかせるのか？」

「そのようなつもりは……」

「ならば、なにか言ってくれるだろう？」

世の中、なかなかうまくいかないものだ。

どうせ夢だ、そう思いなおして私は一つの願いもどきを言った。

「では、私を超人にしてくれないか？」

お前も小さい時、一度は考えたことがあるはずだ。

物語のような非日常を。

相手の私は満面の笑みを浮かべていた。

「クツ、聞きうけた。内容は紙に書いて、君の筆入れにでも入れて  
おこし」

「ま、待て。何故ここで筆入れが出てくる。内容もここで教えてく  
れなければ意味がないではないか」

「気にすることはない。後に全て分かるだろう」

そして、ここで私は目が覚めたのだ」

「以外にびっくりな内容だったな。主に、平松がそんな夢を見ることか」

「馬鹿にしているのか？相川」

ケタケタと陽気に笑う相川に対して平松は少々怒気をこめて言う。  
その言葉を受けると相川は笑うのをやめ、うろたえた顔になる。

「う、悪い。つい……な」

平松は更に怒気を強めて相川をにらむ。  
それをつけて相川は小刻みに震える。

「そそ、そんなことより紙は入ってたのか？こんな話を聞かせてくるなんて」

平松はスクールバックから筆入れを取り出し、一枚の紙を相川に渡した。

相川は折りたたまれてりる紙を開く。中にはこう、書かれていた。

筋力	D
魔力	A
耐久	C
幸運	D
敏捷	B
宝具	???

戦闘続行 : B 瀕死の傷でも戦闘を可能とし、決定的な致命傷を受けない限り生き延びる。

仕切り直し : A + 戦闘から離脱する能力。

対魔力 : C 小規模の魔術を無効にする。

透化 : B 精神面への干渉を無効化する精神防御。

無窮の武練 : C いついかなる状況においても体得した武の技

術は劣化しない。

騎士は徒手にて死せず(ナイト・オブ・オーナー) : A + +  
手にしたものを自身の宝具として扱う。

十二の試練(ゴッド・ハンド) : B

代替生命のストック1を有する。既知のダメージに対して耐性を持たせるため、一度殺した攻撃で再び殺されることはなくなる。魔力供給を受ける、時間の経過によりストックの回復可。

空想電脳(ザバーニヤ) : ?

触れた相手の脳を爆薬に変え、爆散させる。

???

???

???

相川は一通り読み終わると平松を見る。

「……まさかここまでなんてな」

相川は嘆きをふくむ笑顔を平松に向けた。平松は相川の言葉の意味が理解できておらず、ただ首をかしげる。

そして、その疑問を解消すべく口を開いた。

「もしかして、信じてないな？」

「そりゃそーだろ。こんなの信じるほうがどうかしてる」

平松の眉が不満そうに上がる。まさか自分の友人の信頼を獲得できていなかったのか、と。

「なら仕方が無い。実際に証明してみせよう」

持っていた筆入れから一本のシャープペンシルを取りだし、相川の前に掲げる。

ふっ、と平松が力を込めるとシャープペンシルは黒く染まり、葉脈のような黒い筋が侵食していく。

「おいおい、マジかよ……」

常識ではありえない光景を目にした相川は目を見開き、変わり果てたシャープペンシルをマジマジと眺める。

その様子はオタクと言われる人種が女子の絵を熱心に見つめる時のような、おまわず気持ち悪いと思ってしまうほどの光景だった。

「変なこと考えてないか？」

「そんなことはない。どうだ？ これで信じられるか？」

「ああ。流石にここまでやられちゃな」

やられたぜー！ とふざけ気味に相川は大きな声を出した。

その行動は現物を見せられて否定することができなくなっただが、正直なにかの冗談であることを期待しているようだった。

期待に応えてくれる人などはこの場にはいないが。

「よもや、こんなことになるとは思ってもよらなかった。完全に予想外の事態だ」

「そんなの気にしなければいいんじゃないか？あるからって使わなきゃいけないなんてこと、ないんだから」

ふざけた雰囲気を出そうと頑張っていた相川も平松の真面目な声色を受け、思いつきだったが比較的キチンとした提案をする。

その案に平松は曖昧な反応を見せる。

「確かに、今のは使わなければどうということはないが、身体能力の突然の向上に慣れるのは時間が掛かる。その間が問題なのだ」

身体能力？とこぼす相川に平松は説明する。

「先程見せた紙に書いてあっただろう。筋力や敏捷といったものが」  
「ん。だけど筋力が日常生活に関わりそうだが所詮D判定じゃないか」

「それがな、所詮Dと言うが、私は今少し力を入れて叩くだけでこの机を粉碎することができるほどの力がある」

相川の顔が青ざめていく。

背中にじつとりとした、嫌な汗がたつた。

「ヤバくないか、それ？」

「かなり、ヤバイだろうな」

相川は大きいため息をついた後、ガーーーーと叫びながら頭をワシャワシャとかく。

しばらくそれを続けており、平松は黙ってじつと見つめていた。

「しゃーない、この件は明日に持ち越した。そろそろ完全下校時間になっちまうし」

窓の外を見れば、いつの間にか真っ暗になっており、部活動の活動も終了していた。

「すまないな、私の為にこんな時間まで」  
「気にすんな。とりあえず帰るか」

二人は立ち上がり帰路へ着いた。

お互いに頭の中は目の前の平松の非現実でいっぱいであり、これから更に普通とはかけ離れた事態が起ころうなどとは、思っていないかった。

まさか、殺人鬼に出くわすなどとはつゆほども。

## 第二話 私の友人はゾンビらしい

平松に異能がやどってから二週間が経過した。

さすがにこれだけ経てば力の加減を覚えることができ、ごくごく普通の生活を送っている。

それまでは自宅のドアノブをねじ切ったり、シャープペンシルが折れたりする事態が多発したので、『騎士は徒手にて死せず（ナイト・オブ・オーナー）』で宝具化してすっかり壊さないようにしていた。

そのおかげか、これから使うことなど無いだろうと思われるこの能力をマスターしてしまったのは余談である。

そんな日々でただ、平松は力の話をした次の日から一度も相川と会っていない。

相川があれ以来登校してこず、連絡もとれない状態が続いているのだ。学校の担任ふくめ先生達でさえ、相川の欠席の理由を知らない。

不振に思った平松は家を訪ねるが、応答はなかった。

そして今日も、相川の姿はない。

今日こそは来てくれるだろうと願っていたが、来ない。そのまま朝のSHRが始まる。

「また相川はいないのか。ううむ、さすがに本気で搜索を始めるべきか……？」

あまりことを大きくしなくなかった平松も、毎日探し歩いても見つからない現状を前に、国家権力、つまり警察に頼もうと考えてい

た。

最初のうちは、急に親のいる海外の方へ行くことになったのかと思っていた。あまりのも急だった為連絡がでけなのだろうと。

だけど二週間もあれば落ち着いていてもいいはずだが、一向に連絡はなし。

それにちまたで騒がれている連続殺人事件のこともあり、平松の不安は一層をあおった。

もしかしたら、相川は事件に巻き込まれたのでは、と。

そんなことを考えていた松平だったがふと、たつたつたという誰かが廊下を走っている音を聞いた。

松平は聴覚も強化されていたから聞こえたが他の人には聞こえていない。

その音はだんだんと近づき、この教室の前で止まった。じつと音の消えた近くの扉を凝視する。

「すみません。遅れましたー！」

扉を開けて入って来たのは幸薄そうな顔をしている男、相川歩だった。

突然登場した長期無断欠席者に教室中の人間が動きを止めたが一例外がいた。

「相川っ！ 貴様いまままでどこほつつき歩いていたのだ！」

平松である。顔を歪めて相川に詰め寄った。

その間、怒りのあまり魔力を無意識に多量に放出し、相川を含めたその場にいる全員をいやおうなしに硬直させた。

魔力を浴びた一人の教師の姿が一瞬変化していたが、視線は全てが相川に向いていたため知る人は本人を除いて誰もいない。

「まったく、この変態め。無事でよかった……」  
「心配かけたな　　ってちょっと待て。変態ってなんだよ、その後になにを言おうが俺はだまされないぞ」  
「ふう、これで私の心の重荷が一つ取れた」  
「え、スルー！？　訂正とかしてくれないの？　今なら馬鹿って言われても怒らないよ？」

平松はその言葉を聞き、目を細め口角をあげる。  
そして、細くなった目から蔑むような視線を相川に向けて言った。

「馬鹿」

後に相川はこの時のことをこう語った。

「……ゾクゾクする」

後にと言ったが相川がそのセリフを言ったのは平松のセリフから十秒後のことである。

驚きの抜け切ってしない人達にとってこのセリフは、驚きの許容量を超えるほどの威力を持っていた。

つまり、精神へのストレスが大変なことになり気絶してしまうのであった。

朝から気絶者が半数を超える教室。

状況をいまいち理解できていない元凶、相川と平松　　はこの惨劇を前にして恐怖を感じた。

そんな二人に生き残った生徒は暖かい目をしている。

担任は気絶はしていないが戦闘不能なので、收拾をつけるために動こうとはしない。

さらに言うと、このクラスの一時限目はこの担任の授業だった。故に、この奇妙な空間は二時限目の担当教師が来るまで続いた。

時間は進み放課後。

相川は先生達にこっぴどりと絞られたり、ツンツン髪の毛のメガネの少年が朝の出来事を他クラスにいいふらす、といったできごとがあった。

それ以外はおおむねいつもどおりだった。

掃除当番だった平松は掃除を終え、教室に一人で残っている相川に声をかける。

「相川、早く帰ろう。やはり今のご時勢、男であろうが女であろうが夜道を歩くのは危険だ」

「そうだな。それじゃ先に帰っててくれ。俺はもう少し残ってるから」

「……私話を聞いていたのか？」

「聞いてたよ」

机に突っ伏し寝る姿勢をとる相川。

そんな態度に平松はキレた。

「ふざけるな！！ 貴様のせいで私がどれほど精神をすり減らしたと思っっている！ そのような態度ばかりとっていると一から十まで全て私の監視の中で過ごすことになるぞ！！」

もちろん冗談である。

相川がまるで言うつこの聞かない小学生のようだったので平松はお

おげさに言っただけだ。

平松的には、

「あんまり心配をかけるようなら、毎日家に押しかけるぞ」

という意味で言っている。

それはそれで色々問題はあがるが。

そしてよく分からない方向に大きくなったその言葉に相川はこう言った。

「え？別にかまわな いや、やっぱり困る。（今うちにはユ

ーがいるんだった）」

「ならば、さっさと帰るぞ。貴様がこうグダグダしているから日が沈んでしまったではないか」

相川は席から立った。

「よし、帰ろう」

突然の態度の変化に平松はびっくりしたが、いつものことなのですぐに平常時のテンションになる。

ふと、平松は相川の机を見た。見事に教科書やノート、プリントなどで散乱している。

見かねた平松は教室を出て行く相川に言った。

「相川、君は自宅できちんと勉強をしているのかね？」

ビクッと相川の肩がゆれる。

「もももも、もちろん！ 当然だろ」

「どうだかな。あの机がすべてを物語っているように感じるの私だけなのか？」

「ぐっ……ごめん、本当はまったくしてない」

相川は白状した。思ったとおりの回答に平松は肩をすくめる。

平松は相川の机を指差す。

「待っているから、早くかばんに教科書もろもろを詰める」

相川は大人しく指示に従う。

帰路にて平松は相川に今まで聞きたかったことを聞いた。

「二週間、なにをしていたのだ？」

「いや……わざわざ言うほどのことじゃない」

相川の声は心なしか沈んでいた。

平松は、話したくないという相川の気持ちに気づきながらそれを無視して続けた。

「質問を変えよう。なにがあった？ 恐らくだが、マズいことがあったのだろうか？」

相川は口ごもる。しかし、平松は追及をやめない。

「話したくないなら話さなくていい。などと言つつもりは無い。答えろ、相川」

「連続殺人犯にあったんだ」

相川は全てを話した。

殺人犯は謎の術を使うこと。自分が殺されたこと。そしてネクロマンサーに会って、ゾンビにしてもらったこと。

相川の話した内容はとても信じられるようなものではない。普通では。

あいにくと平松も普通ではない。それを承知していたから、相川は最終的にだが話すことにしたのだろう。

「ふう、私の予感は一応的中していたわけだ。そのユーとやらには感謝しなくてはな」

平松是最悪の事態を想定すると、8割がたそれが起こる。

テストや運動などの実力が大きく関係する場合であれば起こらないが、運が大部分をしめる場合では内容が悪ければ悪いほど正確に起こっていた。

そして今回も相川に対して「殺されているかもしれない」という思考は見事に的中した。

「それがあの話をした日の出来事だ。それからユーを狙ってきた絶世美女を撃退して、落ち着いてきたから学校に来たんだ」

「なるほど、だがなぜ私を頼ってくれなかったのだ。私ならお前の力になれただろう？」

「巻き込みたくなかった。平松には、平和な日々を過ごして欲しかった」

はんつ、と平松は鼻をならす。

その表情にはあきれがあった。

「だから今日は俺を避けていたのか、くだらないな。友の犠牲の上になりたつ平穏など意味は無い。それに、ある人物はこう言った。

『つらいことは分割させる。楽しいことは分かち合え』と。私も同意見だが、お前はどう思う？ 相川」

「……いいのか？ 俺と一緒に、いてくれるのか。ゾンビな俺と」「それを言ったら、私は化け物さ。なんせ大型トラックでさえ楽々と持ち上げられるからな」

「う……う………うわああああー！」

相川は顔中から液体を大量に出し、平松に抱きつく。

平松はそつと相川の背に手をまわして包み込むように抱いた。

制服がいくら汚れようと、嫌な顔などせずに泣き叫ぶ相川を優しく静かに抱擁する。

「これからも、よろしく」

「う……あ、ああー！」

この日、二人の絆は更に深まった。

そしてこれから、二人は多くの困難に立ち向かう。

第二話 私の友人はゾンビらしい(後書き)

感想、指摘お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1669z/>

---

私の友人はゾンビらしい

2011年12月10日12時57分発行